

毎月1回 25日 発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第6巻 第7号

1961年6月25日



モリアオガエルの産卵

撮影 長沢武氏

大町山岳博物館

お山の昆虫記

福島 融

「昆虫記」などと生意気なタイトルをかゝげてファーブル大先生の「昆虫記」を気取ったようでは面白くないが、そんな大それたつもりはサラサラ持ち合せていない。たゞ、編集部の「お達し」通りに従つたままである。

さて、こゝで「山」という特殊な環境を指定されたがこれは勿論海拔2400~3000mクラスのいわゆる「高山帯」を指すものと思われるが、主として私のホームグランドである後立山連峰（白馬岳～鳥帽子岳）の登山路で見かける昆虫について雑談風に書き綴つてみたいと思う。

私は小学生時代から虫好きで蝶トンボ、カブト虫など手当たり次第に採集しては彼等を噛み合せたり、無惨にもそのまゝ虫ピンで折箱の中へ刺し止めてはコレクションの増えてゆくのを眺めながら悦に入っていたが、成長してもその醍醐味が忘れられず、採集範囲は遂に高冷で峻険な高山地帯にまで及んだ。

大体一人前の大人がいい年をして捕虫網を振りまわしながらとび歩いている恰好はどうひいき目に見てもスマートとは言いたい。まさに漫画映画を地でゆくの図である。しかしそのような珍妙な恰好を敢てしてまでも追いかけてみたいと願うのが高山蝶研究の魅力であろう。彼等の祖先をたずねれば遠く氷河時代にさかのほるといわれ、いわば氷河期の「忘れもの」としてとり遣され寒冷高寒の高山に閉じこもって今まで生きながらえて来たのである。そのうら付けとして富士山の事実があげられるこの山は昔、活火山として盛んに活動していたが漸次、休火山に移り現在に至つたもので比較的新しい山であるため3,777mもの標高を持ちながら高山蝶は一匹も棲息していないのである。すなわち富士山では火山時代に生物は一旦絶滅してしまい休火山になってから再び生物が棲みついたと推測出来る。だからその以前からいた氷河時代の蝶である高山蝶はいないわけである。北アでこの高山蝶と呼ばれているものは5科10種類ありそのうち、後立山では3科6種類にすぎない。その中から二、三拾つてみよう。

クモマツマキチョウ



クモマツマキチョウ（倉田稔氏写）

この蝶と後立山は因縁が深い。なぜなら明治43年7月18日に爺ヶ岳南方の棒小屋乗越（2400m）でわが国最初の本種雄一頭が記録されたからである。この報告は当時、蝶類研究家の間で大変な話題を呼んだようで彼等の研究雑誌「ゼフィルス」創刊号の巻頭をこのクモマツマキの色刷グラビアで飾つた程だった。

その清楚な美しい姿は高山蝶の代表として恥じないものだが、最近の調査によると高山よりもむしろ標高1000mぐらいの森林帯の谷や、沢筋に比較的多く、雪どけの姫川谷では400mの低地でも発見されている。彼等は、モンシロチョウの仲間で大きさは一回り小さく、雄と雌との色彩が全々違っている。雄は前翅の尖端が美しい橙黄色にいろどられるが、雌ではその部分に黒い条斑があるにすぎない。

後翅は白色だが裏面は雌雄共に濃い草色の雲状の斑紋をよそおい、表面からも透視出来る。幼虫の食べ物はミヤマハタザオというアブラナ科の植物で、母蝶はこの花穂に一卵あて産卵し、ふ化した幼虫は花や果実を食べて約一ヶ月で蛹になり、そのまま越冬する。私は最初この習性を知らずミヤマハタザオの葉に産卵されたものを沢山採集してきて、飼育したところ羽化した蝶はなんと普通のスジグロチョウだったという大失敗を演じた苦い経験を持っている。

タカネヒカゲ

7~8月初旬にかけて縦走路に見かける極く地味な淡褐色の蝶で歩いているときなど足もとから、ヒラヒラ飛び立つのに出合うだろう。そしてほど近い砂礫の上に舞い下りる彼等を観察すると、面白い習性が発見出来る。それは、風が吹くとその方向にむかって地上にとまり、羽を合せて体を右に横倒しにする奇妙なしぐさである。そして又、羽の模様が何と環境にマッチしていること驚くだろう。全く完璧な保護色なのである。有名な高山蝶の研究家T氏によると、タカネヒカゲは三年目に成虫になるといわれる。すなわち幼虫で二冬越冬するわけいかに高山の気象のきびしいかを物語る事実である。なお幼虫の食草はヒメスゲというイネ科の植物である。

ミヤマモンキチヨウ

普通のモンキチヨウの親類であるが、タカネヒカゲと同じ高山性の強いものである。やはり7月下旬~8月一ぱい縦走路で見かけるが、活動が活潑でなかなか敏しょうである。

後立山では鹿島槍冷池以南にのみ発見されており、いまだにそれ以北の山からの記録がない。この種は浅間山にも産するが北アのものは翅の外縁にある黒帯がせまいので、前者と区別され一名アルプスモンキチヨウともいわれる。幼虫の食草はクロマメノキという高山植物である蝶の次にはトンボとくるのがどうも世間一般的な昆虫に対する常識的序列らしいが、トンボは蝶のように高山蜻蛉というはつきりした区別がない。しかし最近A博士によって3科9種類をわが国の高山蜻蛉として提唱された。そのうちから後立山で見られるものを二つ程紹介しよう。

ルリボシヤンマ

ヤンマの仲間で腹部の長さが5%に達する大形のもので黒褐色にルリ色の斑紋をよそおった美しい種類である。同類にオオルリボシヤンマがあり混飛している。尾根筋にある沼池にはどこでも見られ、白馬大池、八方池、冷池、種子池などに多い、よく早朝洗面などの際池端の水草などに静止しているのや、羽化しているのなどを見かける。又、夕陽に映えてそびえ立つ山々を映した池面をゆったり滑走している姿はなかなか貴重がある。

カオジロトンボ

赤トンボの仲間で小形の黒色種であるが雄は頭部全面が純白で雌は黄色である。又、胸部と腹部の界には明瞭な赤橙色の斑紋をもつ可愛い種類である。産地としては前種より局部的で、八方池、神の田舎、天狗原、など北部に片寄っている。

カワゲラ二題

カワゲラといつてもあまり御存知ではないと思うが、登山に關係のあるものを二つ程素描してみよう。

セッケイカワゲラ（一名セッケイムシ）

これは翅のない特殊なカワゲラで雪上を好んで生活している変りものである。6~7月の晴れた日の白馬の大雪渓などで、雪上を活動しているのを発見することが出来る。又、冬山のテントサイトなどで、よく晴れた日に

無数の本種を雪上に見ることがある。体長は1%程の黒い細長い虫である。

トワダカワゲラ

これも無翅のカワゲラで有名なものだが、体長は2%内外、体はほかのもののように扁平でなく円筒形である。棲家は標高2000m辺の溪流で水温があまり変化しないところ(20°C~12°C)を好んでいる。後立山の沢筋にはどこにも見られ、高所では白馬お花畠の溪流や、針の木のマヤクホ辺、又、低い所では黒菱の馬止めの沢で発見されている。キャンプの時や小休止の際、手近な溪流の石や落葉をはがしてみればきっと彼等の幼虫に逢えるだろう。

以上のはすべて高山をアビトとして棲息しているもので低地に移されば生活を営めず故郷の山を思いこがれて、敢然と妥協を拒否しつづける純粋な高山族であるが、次にあける虫は平地で極く一般に見られるものでその旺盛な生活力は植物の雑草にも等しく、高山の厳しい生活条件にもびくともせず、平気で棲息しているものである。

クロバエ

大形のハエで畜舎附近に多いが、山にも多く、山小舎、テント場、などに群がっているのはほとんどこれである山でべんとうなどを開けていると、かららずどこからともなく飛んで来て、悩まされる経験は誰でももっていることだろう。私もこの虫にまつわる嫌な思い出をもっている。それはある遭難者の遺体を収容に行った際、ランクフルトに落ちこんでいたその仏の傷口に、真黒に群がっていたハエ共の何と気味の悪い光景だったことか。又脳底骨折で重体の学生を背負いおろしていたとき、血の臭いを嗅ぎつけてうるさくつきまとうハエの群の羽音が今だに耳底にこびりついてはなれない。

このほかキャンプサイトの時悩まされるブユの群とか、ロッククライミングの最中、顔にまつわるハナアブの類など登山に直接関係の深い昆虫もあるが、紙数の都合上ほかの機会にゆずりたい。最後に加えたいことは、前述の高山性昆虫が近年目にみてその数を激減している傾向であろう。これは自然条件にもよるが、心ない採集家の乱獲によるところが実に大きい。この人達の無分別な採集が氷河の昔から生命を保ちつづけてきた彼等を絶滅の淵に追いやっているのである。前に紹介したT氏はこのことに心を痛め、殺生をタブーとし標本の類を畜えないのを信条とされている。研究の為止むを得ず採集しても観察が終れば、又もとのフィールドへ放してやるという。本当に心温まる話で、採集屋に瓜のアカでも煎じて飲ませたい程である。殊に最近は電源開発工事や登山路の改修などで虫達の楽園は狭められ、その棲家はうばわれているのに乱獲の追い打ちをかけるなどとは全く許しがたい行為であろう。今后少くも高山蝶類は天然記念物並に監視し保護されなければならない。

残雪の不帰岳

北沢昭一郎

「メシダゾー」の声に目をさます。時計は3時を少し過ぎていた。

シュラーフの中でそのぬくもりと、スペアの快適な音をしばらく楽しみながら今日の山行を思う。熱い紅茶と、パンをそうそうに流しこみテントの外に出た。冷い風が気持ち良い。

身にまつわりついで眠気がいっぺんにふっとんだ夜明けに近い東の空、西の空、鏡の上に残月が怪しく輝いていた。

天気は上々躍る心でアイゼンバンドを締める。三峯A尾根、一峯尾根、二峯甲南ルートに入る各パートは出発の遅い不帰岳縦走パーティーの激励の中、唐松沢を下る。アイゼンが面白い程良くきく

X — X

A尾根を単独登攀して「不帰東面はいいんね、来年の五月に一緒にやりましょう」とIが言って来たのは昨年の八月だった。その時は二人で二峯独標ルートをやろうと楽しみにしていた。それが今年、会の行事として不帰岳東面をやることになり、Iはチーフリーダーに私はサブとなり二人でパーティーを組む事が出来なくなった新人の多い不帰岳縦走パーティーのリーダーを自分から買って出た。Iは我々をうらやましそうな顔で見送ってくれた。

X — X

4時30分「国境稜線で合いましょう」の合い言葉を交しながら、Bルンゼ出合でA尾根に入る。NとTに別れた頃は、唐松沢の区切られた細長い空は紅に染っていた。一、二峯間ルンゼ出合に着いた時、ルンゼは朝陽がいっぱいだった。早いとこ尾根に取り付かねえといやらしいのが落ちて来るぞとルンゼを登り出した。急斜面の下降でひざが笑った後の登りはピッチも思うようにながらず、甲南ルンゼ出合に着いた時はやれやれだった。一本立てる。紅茶がのどをうるおしうまい。

一峯パーティーのHとUは既にルンゼを三分の一も登っていた。「やっこさん達かせぐな」「そうだね」とWはクラッカーをほおぱりながら言った。

「Hサーガンバッテ」のエールに「ハックオスゾー」と返って来た。我が友、頼もし健全な健在なりだ。ひとときWと苦笑した。

X — X

甲南ルンゼは、上部三角形状と下部三角形状の両岩壁の間に、無気味に聳えている感じた。コルの上に岩にぶちぢられて小さく見える真青な空だけがこのルンゼ唯一の明るさでもあり、我々の希望でもあった。



白鳥三山を望みながら

X — X

ザイルは結ばれた。2人は1つの目的に向って結ばれたのだ。

ワンピッチは、ワンアット、タイムでクレヴァスとなつた。5米程の雪壁を登る。

汗ばんだ顔にカッティングした雪が降りかかり気持ち良い。30米一杯でバケツを作り、ピッケルをトップまで打ち込みビレーする。「上ってこい」の声に力のこもった声で「お願いします」とWが行動を始める。

お互の血の通つた真赤なナイロンザイルがスルスルと雪の上を走る。

「ヒューン」頭をかすめる落石、いよいよやらしいのがやって来た。我々の居る処は逃げ場のない天国へ通する雪の階段だ。こんな処に長居は無用、早くコルに出てはいけばコンテニアスで、アイスクラフトを発揮してがんばる。

股の下から見えるHとUは一峯尾根に出て休んでいた。さかんにエールを送つて来る。「ガンバレー半分だぞ」急勾配のルンゼでもたかが二百メートルもすればコルに出てるだろうと考えていたが、半分だぞ、の声を聞いた時甲南ルンゼに入つてから時間はもう1時間に近かった。コルの上の空の大きさには変わりなかった。

粘り強く行こう。

最後のピッチは雪と親しく顔をすり合わせての登攀だった。

空が大きく開け、八方尾根が、唐松岳が我等のBC、色鮮やかなテント3張り、そして仲間の居るA尾根、いたいたP2の上のテラスに休んでいる。おもわす叫ぶ。

しばらくエールの交換が続きお互の健斗をたたえる。感

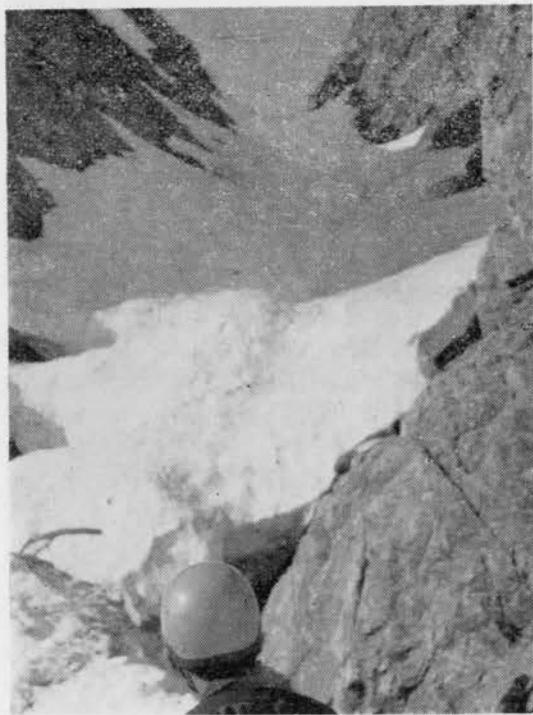
動はめいめいによって違っていたかもしれないが、我々の興奮は一つになって、谷にこだました。

アイゼンを取り、ソーセージ、クラッカー、干しブドウと腹につめる。一服つけながら唐松岳が、不帰の山稜が日の光を浴びているのを見ていた。そしてひどく孤独感にひたった。しかし幸福だった。

X — X

十米程のバンドを左に前進して先鋒者達がどんなコースをとったか、岩場を調べたが山の標識は何もなかった。浮石の多い岩場と不安定に岩の上にのって今にも落ちてきそうなスノーブロックと時々いやらしい音をたてて落ちてくる石とをつくづくと眺めた。

「あのブロックが落ちて来ればいちごだな」とWに言いながら、気持良く入るビレーピンを打ちこむ。ワンピッチ目は、上部ブロックが落ちてくれれば完全に通路となる岩場を登る。ルートはここしかなかった。さすがに不安だったがちうちちはしなかった。北峰がすぐ身近かに尊大な姿で、かよわい虫けら同様に岩場にへばりついている我々を軽蔑の目で注視しているように見えた。なんとかあの横柄な山頂を足下に踏んまえてその虚勢を挫かねは。しかし、そのすばらしい瞬間を思いながらも、居心地の良い場所に達しなければと急いだ。スラブでの4ピッチは落石とブロックになやまされたが、快適なバランスクライミングの連続だった。



甲 南 ルート にて

上部三角形状岩壁よりのリッヂに着いた時は一時間経過していた。

A尾根を見ると、TとNは相変わらず先程のテラスで休んでいた。「長く休んでいるね」とWがゼルブストパンドを締め直しながら言った。「野郎共のことだ楽しみ樂しみやっているさ」と私はカメラのファインダーをのぞいた。二峰正面壁のブロックが不安定に岩の上にのっかっている「あれさえ落ちたらなー」「今日は落ちねえかい」「知っているのは山の神だけさ、落ちたら明日は南峰ルンゼをつめ正面壁で快適なロッククライミングをやれるがー」と残念そうに正面壁を見つめながら私は言った

— X — X

二峰とのジャンクションに出た時真先き眺めたのは一峰尾根だった。HとUは見えなかった。

一峰頂上には黒い人間がうようよしている感じだった。「1人2人ー9人」」HとUは登頂したか、早えなー」「ヤホー」と黄色い声が一・二峰間ルンゼを越えて来たこちらからもドスのきいた声で返す。ルンゼはしばらくこだまのるっぽとなつた。

一・二峰間ルンゼ側にすっぱりと落ち、北峰ルンゼ側に雪庇を出したスノーリッヂを慎重に登る。

第一岩峰を左に巻き、第二岩峰を直登しての登攀は、右に白馬三山、左に唐松、五竜を眺めながらでまったくすばらしく、散歩の気分だった。テラスに着いた。

北峰も真近かた、一本立てる。縦走パーティもそろそろ上に来るころだ。「うまいものは皆んな食なきゃ、連中にたかられるじ」とWはもうミカンのカンズメを切り出していた。私も同感。

ミカン汁の甘さが口の中にしみてうまい。「明日も天気持つぞ」と晴れ上った初夏の空を見上げながら言うと「明日も降らなきゃもうけもんだがね」「晴れたら二峰西面でパーティーを組むことになっているが、自信あるかい」とWの顔をのぞきこむと、彼は三ツ道具をしまう手をやすめて真黒に日にやけた顔に白い歯を見せ、はにかんだエミを浮かべただけだった。北峰でしきりと早く上つて来いとさわぎ出した。「今行くでまつてろー」

— X — X

「そこを左に巻いて次を右に………」とアドバイスする仲間の注視の中での登攀は少し抵抗を感じあまり愉快じゃなかった。仲間の気持はありがたいが、やはり自分でルートをきり開いて静かに登りたい。

最後の岩稜を登り、剣を見た時は、もう登るものがないという安心の気持だった。Wを見ると、あたりを見廻しながら心の底からわき起る喜びに相好をくずしていた。二人は手をにぎり合いながら登頂の喜びにひたつた。

それは他の仲間と握手するたびに一層大きなものとなつた。

(大町山の会)

目 ン 物

…信濃のわらべ歌小考(2)…

福沢 武一

目にはいった塵埃の名称が南信では特殊である。上伊那ではメーモノ。目物、—目にはいった物の意。下伊那までいくと、メンモノと変っている。これは「目ノ物」で、同根語。

目のゴミは小さくても気になることおびただしい。そこで、これを取り除く唱えが生れた。当の下伊那では、メシモノ、メシモノ、出ておいで。(熊谷元一氏「ふるさとの唄」)

メンモノ、メンモノ、三度つばはいたら出ておいで。

(牧内武司氏「下伊那郷土民謡集」)

メシモノはメンモノの誤記。または、誤植。メーモノからの紛れではないらしい。とにかく、この二つの唱えはまこと物腰が柔かい。熊谷氏も注記する、—三度つばをはきながら唱える、と。これはなにのまじないだろう。口先では下手にて順い上げておき、実は唾棄するみたいなしぐさではある。

牧内氏は「てでおいで」を「掃溜へ行け」と転調した形も報する。つばをはくようなところとして掃溜(ゴミ捨場)がもちだされた。一方、目のゴミのいくべき掃溜をもちだしたからこそつばをはくことになったともいえる。どっちが先か? ……僕は後者に加担する。なぜなら—この方には類縁をもつ唱えがあまりにも多い。

じじいとばはあ、ゴミザリではきだせ。しょいだせ。

これは上伊那中部の古い唱え。ゴミザリは熊手。それは高砂の爺婆になくてならないもの。その縁故で両者が登場した。はきだし、しょいだして捨てるところは掃溜その意味で牧内氏報するところの唱えに無縁ではない。ついでにいうと、上記のように唱え、そこで当の目を吹いて、フーフー、ヘイイーナ(もういいね)といい添えるそれはたいてい老人。相手はあどけない子供。こんなことで目のゴミが吹き払われてくれればいいが、さて…。

これに一番近い唱えは東筑摩郡奈川に拾われている。県外にも酷似のものがある。

眼のごみ、ちっさとばはさと、おれの目んだけ、こまざれを、はって来てかき出せ。(「木曾民謡集」奈川)おん爺おん婆、熊手もってきて、搔き出せ、搔き出せ(「伝承童謡集成」6 静岡)

爺婆と熊手とが大幅に共演する。ハッテは—その原義はともかくも、目の中へ爺婆が熊手をたずさえてはいるのであって、これはすでに妖精かなにかの爺婆だ。

その次に近いのは北安曇郡の番になる。

おれの目へ何はいった。爺と婆と杖ついて鼻へ行け。(「北安曇郡郷土誌稿」4)

ここにも爺婆が登場する。熊手はもうない。代って、

老人にはなくてはならない杖になる。杖をついていく所は、奇妙なことに、ここでは鼻なのだ。思うに、その鼻は顔の中では山である。老人たちが山へ登るには益々杖が必要になってくる。……こう解釈すると、鼻が持ちだされても不思議はない。ただし、メーモノと鼻との関係は必ずしもついていない。ひょっとすると、山は掃溜と同じく、不要なもの、けがれたものを捨てる場所なのだ捨てられたのは姨捨山の老婆ばかりではないことになるその裏づけに次の唱えを援用する。

眼物、眼物、向う山へ飛うでいけ……。(「伝承童謡集成」6 高知)

ちちんぶいぶい、遠の山へぶい。(同書 栃木)

ちんぶんかんぶん、くまざらはらって、大平山へ吹つとべ。(同上)

遠い四国でも、目のゴミをメモノといっているのは面白い。栃木の方は、唱え出しの音が実際に愉快。ブイといい、吹つとべといっているところ、老人が口をとがらせて吹いてやっているはず。上伊那の例が思いあわされるそうした例を県外から一、二ひろうと、

地蔵様、おれのマナグ(目)さ埃が入えた。吹つ飛ばして呉らっせえ。ふう、ふう。(同書 山形)

ワラス(童、わたし)のまなこさ埃はえった。爺さと婆さとマカダンブリ(未詳)もって突き出せ。ぶう、ぶう。(同書 岩手)

爺さ婆さ、しゃくしもって吹いていけ。(同書 岐阜)
も一つ、僕のひそかに考えていることを語らせてもらいたい。それは、爺婆がしきりと使用されていることについて。ゴミのよしみで熊手がでた。熊手のよしみで爺婆がでた。そう考える一方、この逆に、ゴミを爺婆そのものになだらえたのではないか? ……というと、老人たちにお氣の毒だけれど、ゴミをいやしめて爺婆としたかと考える。そうした解を助ける例は、

じじ、ばば、出ろ。(同書 群馬)

もしこの解が許されるならば、さきにあげた北安曇郡の場合がきわめてすっきりと受けとられる。それを次に示すと、

おれの目へ何かがはいった、それはゴミ—爺と婆だ爺と婆なら杖でもついて鼻(山)へ行つてしまがいい

最後に一言。かりに以上のようなとする。と、はじめゴミを爺婆が同一だったのが、いつのまにか別々になり爺婆がゴミをとりのぞく人物にしたてられていった。そんなことが実際に起っている実証のためにも更に多くの類唱を拾う必要がある。とくに希望したいのは、まず手近な県内を当ってほしい。一人、二人の力にはあまる。同好同学の士によりかけたい。(屋代東高校教諭)

北アルプス山系における モリアオガエルの分布

長沢 武

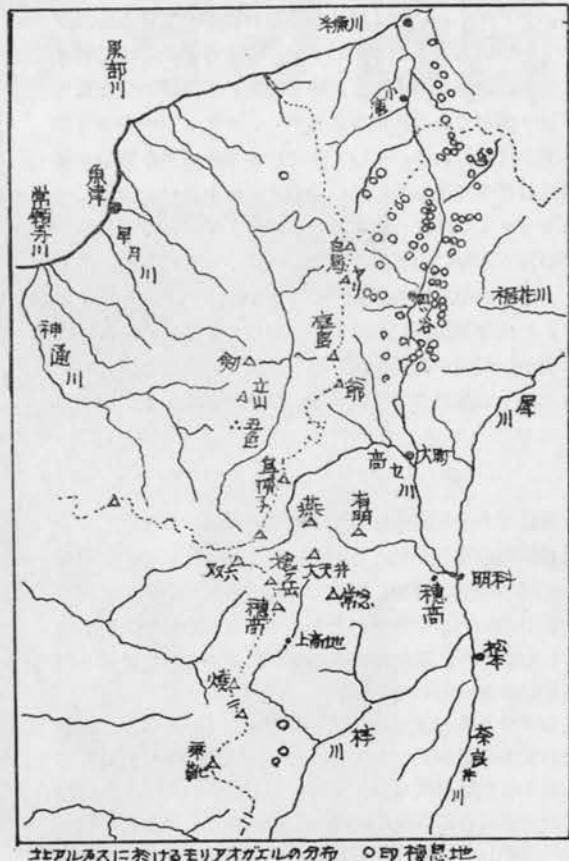
モリアオガエル (*Rhacophorus schlegelii arboreus* Oetk.) は赤蛙科青蛙属に属する蛙で、本州、四国、九州の山地帯に棲んでいる。大きさアカガエル位の鮮緑色の美しい、可愛らしい蛙である。この蛙の特長は、強い吸盤を持っており、池や沼の端の木の枝や水田、沼等の水辺に、乳白色泡状の粘液質に富んだコツベパン位の大きな卵塊を産むことで有名で、この卵の沢山産む処は全国各地で、天然記念物の指定を受けている。

北アルプス山系における分布

1. 水平的分布

この珍しい習性を持ったモリアオガエルは、南方系統の蛙であるが、北アルプス周辺に沢山棲んでいる。筆者は昭和20年以来、主として長野、新潟両県側について調査して来たが、棲息地は後立山連峰の姫川水系に特に多くその一部は犀川水系にまで伸びている。主な地点を南から捨てみると(図参照) 犀川水系は少なく、沢渡より白骨温泉の中間の池(昭和27年発見)と乗鞍岳山麓の番所、大野川白樺峠頂上の池他の数ヶ所が現在知られているに過ぎない。

こゝから棲息地は北部へずっとなく、鹿島槍山麓へ来て、黒沢と天狗尾根の一部に棲息している。そして佐野坂峠を過ぎると、が然多くなり、姫川水系の各支流の海拔400~900mの山間部の水田あるいは池沼附近に広く棲んでいる。そして新潟県に入っては、大所、根知川の支流は勿論、海川、早川等の流域にも棲んでい、富山県では小川温泉より、朝日岳への途中、恵振岳の池に棲んでおり、立山方面では(「立山」—その自然と文化—)に報告されている。



2. 水直的分布

北アルプス山麓、特に姫川水系に多いモリアオガエルは、南方系の蛙でありながら、此処では2000m近くの寒地帯にまで分布し、産卵場も1000mから2000mの間に17ヶ所を数えることができる。

これらは天狗、遠見、八方尾根や梅池周辺、風吹大池大所川の上流などで、いずれもブナ帯森林近くの池や沼を中心に棲むものである。またその反面、下流の糸魚川市では、日本海近くの海拔110mの地(下早川月不見池他)にも分布している。しかしながら、分布の一番多いのは、400~900mの山間部の湿地性の所で潤葉樹林帶で、その中に池沼を持つか、温性水田で、その近くに森帶を持つ所である。

(山博調査員 白馬村役場)

地区名	調査による 棲息地数	推定産卵数
大町市平区	2	9
美麻村	9	94
白馬村神城	17	154
〃北城	23	482
小谷村南小谷	14	250
〃中土	13	60
〃北小谷	19	654
糸魚川市	16	264

町村別棲息地数及び推定産卵数

センダイムシクイ

長沢修介

木々の芽が吹き始める頃になるといつも沢山の小鳥達がやつて来て何處に行つても小鳥の歌声が美しく響いている。センダイムシクイはこれ等の春にやつて来る鳥達の中でも早い方で木の芽がわざかにのぞき始める頃にやつて来る。毎年ウグイスの初鳴きを聞いて少したつと夏鳥では一番早くあの特徴のあるチヨ、チヨ、ジーの鳴き声を聞かせてくれる。そしてオオルリやキビタキ等の主な夏鳥の渡つて来る頃には自分のテリートリーを決めてそれを守つて早朝から歌つてゐる。ウグイス科の中でも小形の方で本邦にいる鳥の中では最少の部類に入る。他のウグイス科の鳥は巣に生活するものが多いがセンダイムシクイは落葉樹林に生活するものの方が多い。体を活潑に動かして梢や樹間を飛び廻りあまり群ることはない。巣は地上の崖地や草の根元等に作り側面に出入口のある



球形の巣である。

卵は純白色で斑紋はなく5~6月にかけて4~6個の卵を産む。又センダイムシクイはホトトギス科のツツドリの仮親でもあってこの鳥の小さな巣からあの大きなツツドリが成長することがたまたまある。

ノジコ

太陽は木の若葉を通して一ぱいに降りそそぎその下には沢山の草花が色とりどりに咲き競つてゐる。初夏はヒナ鳥の季節、何處に行つても嘴の黄色い奴が一ぱい羽振りのいいのやらまだよちよち歩きなのに一人前の顔をしたのやら。皆親鳥の心配を外に始めて見る世界を我者顔に歩きまわつてゐる。

このヒナも今日巣立したばかりでまだ2mと飛ぶことができずうぶ毛が頭のあたりに一ぱいに残つてゐるくせに枝から枝えと飛ぶのが面白くて下枝から上へ上へと飛びうつることに懸命だ。親鳥は子供を守ると餌を運ぶのに急がしく目まぐるしく飛び廻る。ヒナは食べることにも飽くことを知らず親鳥の顔さえ見れば黄色い嘴を一ぱいに開いて餌をねだる。

ノジコは当地では漂鳥というよりはむしろ夏鳥の部類に入り4月下旬頃にやつて来て山地の雑木林に棲息する。当地では近種のアオジはほとんど見られないがアオジは至る所でその美声を聞かせてくれる。灌木の樹枝上に椀形の巣を作り帶青灰色の地に暗褐色の雲状又は点のある卵を3~5ヶ産む。夏季は昆虫を食し秋冬は草の種子を食べる。美声のため飼育する人も多い。



3.4、千葉生物学会、博物館だよりNo7、小樽市博物館自然科学研究室博物館No28~1~2、国立自然科学博物館四つばし61~4、大阪市立電気科学館、稲友、東京北稜山岳会、国立公園No137、国立公園協会、九州の山、立石敏雄、山とスキーの会々報No135、朝日新聞東京本社山とスキーの会、峰No2~2、2~3、広島山岳会 小六教育技術、渡辺定三、登高、東京登高会、ハイカーN067、山と渓谷社、箕面の生物、藤下英也、立教大学博物館研究 Mouselon No7、立教大学博物館学講座、山嶺No373、東京野歩路会、葛城No132、泉州山岳会、5月会報、京都趣味登山会、京都山岳、京都山岳会、岳友No59、岳友クラブ、わらじNo4~42、わらじの仲間山毛櫟林No59、広島山の会、山辺No16,17、横須賀登高会
(敬称略)

資料寄贈

山毛櫟林No58、広島山の会、かもしかNo19、敦賀山の会、O.M.C No137、奥多摩山岳会、千葉生物誌No10~

お願い 本紙の購読ご希望の方は1年購読料20円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。
大町山岳博物館

山と博物館 第6巻第7号 1961年6月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町

信州印刷大町工場